

## 前川文夫\*： オシャグジテンダとエノキ—その民俗と語源

Fumio MAEKAWA\*: Ethnobotanical comments on  
*Celtis sinensis* and other plants

まことに唐突な二つの種類の出し方であるが、単にとじつけたものではなく、ある一つのヒントに両者がつづいて来て、同時に新しい見解であるので、こゝにのべて御批判をも得たいと思う。

オシャグジテンダ (*Polypodium Fauriei* Christ) は標本にすると奇妙に葉柄から葉身へかけて円くなるので目を惹くが、その和名の奇妙さも目立つ存在である。牧野図鑑の旧版には「御社貢寺でんだの意、此種始め信州木曾なる社貢寺の林中に採る、故に斯く名く……」とあり、地名か寺院の名から由来するかのようにとれる。それを受けて「木曾谷の植物」を著わした奥原弘人氏は、探索の結果、木曾に社具寺という寺院がないこと、しかしオシャゴジの地名は何ヶ所かあること、木曾福島駅の近くの万郡部落に三狐大明神という祠があり、土地では安産の神として「オンシャゴジサマ」と呼ぶから、木曾の中心にある祠という点でこの祠の名が和名に採用されたかと述べている(同書 p. 172~3 (71))。私が考えるには、三狐大明神の名も稲荷の狐の信仰が混じって大明神としたとすれば大明の二字はあからの追加であり、三狐神が古い発音を伝える漢字でこれはサコジンとなり、オシャゴジと同じことになる。これで社具寺又は社貢寺が仏教の寺には関係がなく、むしろ何か別の信仰対象と見るべきであろうと思われたが、それ以上には進めなかった。

ところが最近一つのヒントがあった。それはゼロックスが出している雑誌グラフィケーションに昨年から連載されている山田宗陸氏の「花の文化史」の中の一つで本年1月に発表された「タタエノキ」であった。この記事、むしろ論文は、普通見るような花の文化史ではない。植物が人間の生活の中に深く食い込んでおりその密接な関係は人間の生活がはじまって以来つづき且つ変遷しているという事実をふまえて、その上で今はもう歴史の彼方に消えてしまった人間の考え方や暮らし方を、逆に植物の在り方を通じて植物に語らせることをねらっていると述べており、中々興味の深い内容であり、私としては語源考察に教えられるところも多くて感謝しているのであるが、その中にオシャゴジが出て来たのである。そして読んで行くうちに、いつかエノキとムクノキの語源と密接に結びつかざるをえないと考えるに到ったのである。

\* 東京農業大学育種学研究所。The Institute for Breeding Research, Tokyo University of Agriculture. Kami-yoga 2-4-28, Setagaya-ku, Tokyo.

山田氏の述べられたことをまず要点をあげる。そしてこれは長野県諏訪におられる考古学者藤森栄一氏の 諏訪大社の祭神や 銅鐸の研究がその背景をなしていることもわかった。

それによると、諏訪大社の祭神は今では建御名方命（たけみなかたのみこと）であるが、これは8世紀から後に大祝氏（後に諏訪氏を称した）が諏訪に覇を唱えて以来のことで、それより前は5世紀からつづいていた守矢氏が信仰していた洩矢神（もりやのかみ）であった。この洩矢神が統轄していたのが中部日本にひろくひろがっていたミシャグチという自然神であったという。この自然神は漢字では御左口神とか御社宮司などと書かれているが、これは明らかに宛字である。これは部落のある丘の上だとか、谷の入口とかに鎮座し、はじめは社殿もない。必要なときに巨木や尖った岩とか特別に立てた棹などに依坐（よります＝降りてくる）神であるが、土地、生産、食物などに強力な権限を持っているので、農民或は山村民の間には深い尊敬と畏怖を持たれていたに相違ないという。

さてオシャグジデンダのオシャグジは御社貢寺と書くが、奥原氏のあげた三狐大明神の原形、三狐神（御の字は敬語とみなして脱落したのであろう）と共に恐らく同じく宛字でその正体はすでに變形してしまっているらしいが、その起源は正に諏訪のミシャグチと共通であろう。

ところで洩矢神は配下のミシャグチを巡回するのであるが、それには大木のところへ降りてくるので、そのような大木の根元のところで祭礼を行うのである。諏訪大社の社殿の側に立つ太く高い柱、（御柱という）は正にその典型的なものであって各々の小さいミシャグチのところの木はそんなに大きくはなかったのかも知れないが、この木がミシャグジの木又はシャグジの木である。木曾の或るミシャグジの木に多分問題のシダが着生しており、それを採集した折にミの漢字の御をオと呼んでオシャグジデンダとなったものであろう。横道の話だが東京の石神井（しゃくじい）などもミシャグジ信仰の東端かも知れない。

次の問題はミシャグジの木のことである。柳田国男氏の「神樹篇」（1915）（柳田国男集15巻所収）の勸請（カンジョウ）の木の条下に、諏訪大社の行事を書いた一宮巡詣記にこのミシャグジの木にあたるものをタイ木としていると記す。これはまたタタエ（湛）とも呼ばれいづれも巨木である。タタエまたタイはあたり（祟り）から来ているという。藤森氏は、弥生文化の特徴たる銅鐸がでるところは山腹の斜面で、何も特徴らしいものがないのがふつうだが、これは曾ってはそこにタタエの巨木があって、そこに洩矢神が天下り、その巨木の根元で祭礼が行われたのであって、銅鐸はその祭器であるという。そしてそこは沖積層の低地で古くからの稲作の中心地と目されるのであり、しかもその近くには縄文中期の土器を出す遺跡が多い。つまり曾っては巨木が立ち著るしく目立つところであったのに木は枯れて朽ち去り祭礼は滅んでしまった。

ので何の変哲もないところになったのだとみているのである。

山田氏はこのミシャグジの信仰を縄文後期に存在した焼畑農耕文化に関連のあるものとして、その場所は農耕のための測定や展望に都合のよい地で、このミシャグジの木によります神に食物の豊饒を祈願したのであろうとしている。だとすれば、オシヤグジデンドは縄文の信仰の残渣に関連して命名されたことになる。また焼畑農耕だとすれば、山の神が時に応じて耕地の神となって里の巨木の梢に止って収穫が終るまで守ってくれるという山の神の信仰の祖型にも間接的につづくことにもなる。

それではミシャグジの木、或はタタイ木はどんな樹種であったのかを考察してみよう。上記の一宮巡詣記にはマユミタタイ木、峯タタイ木、ヒクサ（干草）タタイ木、椽（トチ）タタイ木等が載っているという。この中では樹木名はマユミとトチである。あとの二つは地形や植生の名と思われる。そこでマユミとトチとを挙げるができる。マユミもかなり大きな木となるし、トチには大木もあるから共にタタイ木の資格がある。だがここで推理をする必要がある。というのは、干草とか峯とかの名をかぶせたものは木の名は直接うたわれてはいない。しかしタタイ木として十分に役をはたしてたとすると、これは特定の樹種であったのであり、それだからこそ樹種名を使わず、その所在地を示すことで用が足りたのではないか。するとマユミヤトチはむしろ正規の特定の樹種ではないが神がよりますのには正に格好の木で代用を十分にさせえた大木であったのであろうというヒントである。では何の木がふさわしいか、私はそれがエノキであったと推定するのである。

この推定には柳田氏の神樹篇の中にエノキに関して各所に散在して述べられているデータが役に立った。

1) はエノキが化けるという受けとり方である。化けるということはその木に異常な力があることを認めていることである。それは神の木であることへ通ずる。神樹篇に引用されている武州比企郡鎌形村の農家で起った怪異は木の枕のようなものが背戸口から家の中へとび込み、改めて出て来て、庭のエノキの空洞へとび込んだという話はまことに暗示的である。木の枕を木の玉とすれば、これは火の玉の誤伝である可能性があり、それは一つの眼の神が木の柱に下りてくるという古い土俗信仰に通じるからで、それはタタイ木の信仰のこわれた残りではないかと思わせるものがある。名古屋地方で福榎といって、屋敷の乾（イヌイ=戌亥）の隅にエノキを植えて禍を防ぐということや東京下板橋岩之坂中山道の道ばたにあった縁切榎がその前を通った嫁入り行列の主人公の結婚を妨害するという、杖がエノキになったという説話、またある男が無実の罪で処刑された時、死んだらエノキに化けてやるといったその墓に生えたという怨の榎（伊豆新島所在）の話など、なぜエノキでなければならないのかを考えると、これらもみなエノキに神がよりました古い信仰のいちじるしい変形であろうと思われる。

2) はエノキに特によく宿り木がつく現象である。これについて、柳田氏はなぜエノ

キが神怪の木と認められたかの理由として、“植物生態の研究が今よりもずっと進んで、何か此木の特徴の、能く尋常無邪気なる観察者をして驚嘆せしむるものがあったことを発見してくれる日を待つ他は無”と植物学者に下駄をあげた上で、単なる推測であることわりながら宿り木の問題を提示している。残念ながら今日なお柳田氏のいう無邪気なる観察者を驚嘆せしめるような事実の発見ができないが、氏の推測は結局は的を射ていると思う。確かに今の常識では異なる植物の寄生であることは明らかだが、全く違う形態の枝が、しかも丸く集まり、また冬にも落葉せずにいることまことに異様で、何か特別の力があると思われ、その位置と姿とからこれこそ神の座であると受けとったであろう。

3) エノキの大木は空洞を生じ易いこと。空洞は入口がせまく中が広く、これは常に尊といものの宿り場であったのは一般の受けとり方であった。ましてしばしばその空洞の底から水が湧き、水を湛えたとなれば一層その奇蹟は神に結びつけられる。

4) 道祖神の信仰とエノキとが関連すること。道祖神はサエノ神である。道路の守護神であるが、古い民間信仰で山の一つ目の神の変形である。道路の一里塚は里程標であると共にそこに植えられた木は道祖神の木、即ちサエノキである。一里塚にはなぜかエノキが使われる。これの古い関連の由来が忘れられてしまって、俗にいわれる織田信長がよの木（松以外の木の意味で余の木）を植えよといったのを聞き誤ってエノキをうえたという俗説を生じたものと思われる。そしてこの道祖神こそミシャグジの変貌のなれの果てであった。

5) この木に方言がないこと。ヨノキなど若干の音便による変形はあるが、方言のないことはヤマモモの場合と似ている。柳田氏は“一千年を一貫して此の木の口語がエノキであったことは、恐らくは大切な痕跡であろう”と述べている。

6) 漢字の古い読み方の中にタタイ木を暗示するものがあること。古く朴をエ（エノキのこと）と読ませた。現在でも中国ではエノキを朴に使用している。そしてエノキは日本のものと同一種である。朴の文字は木扁にト（すなわち占う）であって、日本でも古く古くにエノキを使ったことがあるところをみるとこれも信仰に関連する事実があつて、しかもそれがそのまま渡来したものである可能性がある。大陸から入った焼畑農耕に伴う信仰であることもそれと両立する。朴は今日、日本ではホウとよみ、朴歯の下駄などと使ったが、それは厚朴をホウノキに当てたことに始まりその簡略化である。厳密には厚朴は支那中部産のホウノキの近縁種 *Magnolia officinalis* のことで、厚い樹皮を剝いで薬用にする。樹皮はエノキに似た色沢だが厚いから厚朴であろう。榎は日本で勝手に宛てた字である。

7) 古くはエノキと同一視されたムクノキの漢字の読みにもタタイ木を暗示するものがあること。柳田氏はムクに当てた棕は古くクラ或はムホコと読んだという。棕をクラというのは京都の南の小棕池（今はすっかり埋立てられたが）などの読みに残っている

が、木扁に京で神の座になる木の意味であり、ムホコは神の杖の意味であるという。これは古くにはエノキもムクノキも共にタタイ木の役を演じていたことを示すものといえよう。

8) タタイ木はタタエの木でもある。このタタの頭が失われるとエノキとなりうる。タタイ木にモリヤの神がよります信仰が徹底して行われていたときはタタイギ、またはタタエギであったろう。それが文化の交代が浸入かに依って急速に衰え、遂に形骸化し、それさえも変貌してはじめの意味が忘却されると、言語の省略がはじまり、遂にタタがとび去ってエノキになったのであろう。

信州や北関東以北ではエノキはあってもムクノキはないから、単にエノキですんだに相違ないが、関東から西のやや温暖な土地にはエノキとムクとは並び生ずる。信仰の対象からはずれて材の有用性、食用となる果実の大きさと甘さの優秀性、さらに葉の表皮細胞壁の粗糙さを器具の研磨用にする特殊性などでムクノキをエノキから区別する必要が新たに生じた。これに対してとられた区別がムクエノキの名であった。これはムク=剥くであって、エノキの樹皮は滑らか（もちろんおおまかな表現である）であるのに対して、ムクノキは大木となればかならず縦の不規則の割目でせまい片々にはげてくるというよい区別点を強調したものとしか思えない。

エノキの語源については、モエノキ（日本積名、枝がもえでるから）、枝ノ木（塩尻、枝が多く、切ればよいよ繁るから）ヨノキ=嘉樹（柳田国男、めでたい樹であるから）などがあるが、上の考察のように、一見バラバラな事実が、一本の柱を通すと皆関連してくること、言葉は生きている、しかも進化するという立場からみれば、タタエノキの省略化であると考えたい。

そしてこの省略化は縄文末期の焼畑農耕文化に、急速に浸透した弥生前期の稲作農耕文化による生活基盤の変動にもとづく信仰の切りかえよりも弥生から古墳文化にうつった折の影響であると思う。そこではエノキの名が確立し、やがてまもなく経済生活からくる種の区別の必要に答えてムクエノキの確認と命名となったのであろう。ミシャグジの信仰は末端化して遂に道祖神（サエノカミ）として僅かに民衆の間に残りエノキはそれに伴う道路の木となったり、化けるというそこはかといない力が辛うじて残ったとみられるのである。

### Résumé

The author considers that the Japanese names of *Celtis sinensis* and *Aphananthe aspera* were originated from Tatae-no-ki in Jōmon Era, then abbreviated as Enoki in or after the 8th century.